

# 2024 年度入学試験問題

## 国語

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。  
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 32 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに1つだけをマークすること。  
同じ解答欄に2つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が6つ無い場合があります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

## 第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヴァレリーほど引用される書き手はめずらしい。その詩の一句、断章の一文、講演の中で述べられた一言は、いくつもの言語に翻訳されて、雑誌のコラムや新聞記事、小説、哲学論文、手紙、演劇の台詞等々、さまざまな種類のテキストに登場しつづけている。あるときはエピグラフとして文章の冒頭にかかげられ、またあるときは議論を導く問いの役割を果たし、またあるときは結語の位置にすっぽりとはめこまれていたりする。詩人らしい口当たりのいい文句のせいだろうか、引用された言葉は口から口へ伝わる口頭伝承のようにつきなる「孫引き」を誘発し、こうした引用の連鎖の果てに、もはや典拠が不明になっている場合さえある。もちろんあらゆるテキストが引用の織物であることは言うまでもなく、ヴァレリー自身この意見の積極的な支持者であつたわけだが（……）、そうだとしても、このちりばめられ具合はやはり群を抜いている。文書や手紙など研究の対象となる資料の総体のことをフランス語でコーパス (corpus) と言うが、この語の原義はcorpsすなわち身体である。日々ヴァレリーのコーパスを前にしている者にとっては、まるでヴァレリーの身体が細かい断片となつて世界中の新聞や書物に埋め込まれているように感じる。

なぜヴァレリーは引用されるのか。言い方を変えれば、いかにしてヴァレリーの言葉は、みずから引用させるのか。それは一種の力である。もとのコンテキストを離脱して、さまざまなテキストに入り込み、増殖する力。この旺盛な「繁殖力」とでもいふべき力は、ヴァレリーがフランス第三共和政を代表する文学者として確固たる地位を築いていたという事実を差し引いてもなお機能する、言葉そのものの力である。ヴァレリーはこの力を使って、作品をつくり、芸術について思考した。それはどのような力なのか。いったいどのような力が、ヴァレリーの詩を、散文を、内燃機関のように密かに動かしているのか。

(……中略……)

ポール・ヴァレリー (Paul Valéry) は、一八七一年に南仏の港町セットで生まれ、一九四五年にパリで没した。父バルテレミーはコルシカ人の税関吏、母はイタリア人でセット駐在のイタリア領事の娘である。この父は早く他界し、それ以降はヴァレ

リーより八歳年上の兄ジュールが家計を支えていくことになる。ヴァレリーが十三歳のとき、一家は同じエロー県の県庁所在地であるモンペリエに移り住む。ヴァレリーはそこでモンペリエ高等中学、モンペリエ大学と学生生活を過ごす。大学は法学部だったが文学への関心はつよく、十九歳のときにはすでにマラルメ宛てに手紙と詩を送り、返事を受け取っている。大学卒業後、二十三歳のときにヴァレリーは単身パリに暮らしはじめる。質素な部屋には数式で埋められた黒板と、十六世紀の彫刻家リジェ・リシエによる死骸像のレプリカが置かれていた。ヴァレリーの芸術哲学を明らかにするうえで「身体」を重要なキーワードとみならず本書にとつて、このような像が置かれていたことは興味深い。像は二十五歳の若さで戦死したルネ・ド・シャロンという人物の墓碑として作られたもので、現物はフランス北部ムーズ県の教会に安置されている。死骸へと変貌しつつあるさなか、残された筋肉を<sup>(ア)</sup>ユウゼンと動かして自らの心臓を高くかかげているその肉体は、グロテスクというよりは優美さすら感じさせる。生きながら、みずからの死を味わっているかのようだ。

このどこか理科室のような部屋で、ヴァレリーの生涯づくことになるある習慣が始まった。のちに『カイエ』と呼ばれることになる思索ノートの執筆である。朝まだ暗いうちに寢床をぬけだして机に向かい、数時間のあいだ、一日が始まる前のまっさらな頭に行き来する「将来わたしの考えになるかもしれない考え」を書きとめること。<sup>(1)</sup>そこには「日記」のような出来事が書かれてはならず、また「わたしの思想」の構築でもなく、断章形式によって、「可能な思想」「自分の形成作用」が展開されていく。およそ五十年もの長きにわたって書き続けられたこのノートは総冊数二六一冊におよび、基本的には私的なものとして書かれたものの（もつとも三十七歳のときにはテーマごとに断章を分類する作業に着手しているが）、<sup>(注3)</sup>現在ではフアクシミリ版、活字版ともにアクセス可能となっており、<sup>(注4)</sup>主要な断章はプレイヤード版全集にも収められている。テーマは文学、哲学、数学、物理学、歴史、政治にいたるまで<sup>(イ)</sup>キにわたり、いくつかのトピックは繰り返し手にとられ、あるいは過去の断片にあとから書き込みがなされ、ときに図や絵が付与されていることもある。詩や対話篇等の公的に発表された作品とならんで、あるいは活字版の出版以降は作品以上に、ヴァレリーの重要なコーパスとなってきたのがこの『カイエ』の膨大な断章である。もちろん本書の研究にとつても、『カイエ』の読解は非常に重要な位置を占める。

A

、公に向けたヴァレリーの活動は、一九〇〇年頃から一九一七年までの沈黙の期間を隔てて二つに分けることができる。前半はジャンニ・ゴビヤールと結婚するまでの独身時代であり、後半は第一次大戦後のさなか次男フランソワが生まれてからの、「フランスを代表する知識人」としてオウ<sup>(ウ)</sup>・セイに活動した時代に相当する。前半の独身時代の活動は、ステファヌ・マラルメやアンドレ・ジツド、ピエール・ルイスらとの交友のなかで、つきあいのある雑誌に自作を掲載するという形が中心である。具体的には、詩『ナルシス語る』(一九九一)や哲学的エッセイ『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』(一九九五)、小説『ムッシュュー・テストと劇場で』(一九九六)などが発表されている。一方、後半の知識人時代は、単著の出版と講演活動が中心となる。ヴァレリーを文壇の花形にしたのは長編詩『若きパルク』(一九一七)や詩集『魅惑』(一九二二)、評論集『ヴァリエテ』(一九二四)などの出版であり、また一九二〇年代中頃からは各地のシンポジウムや学会に招待されてはオウセイに講演活動を行うようになる。一九二五年にはアカデミー・フランセーズの会員に選出され、一九三七年からはコレージュ・ド・フランスの詩学講座での教授もこなした。われわれの「芸術哲学」に関わる議論が、ヴァレリーの口から多少なりとも体系的に語られるのはこの後半の時期である。とりわけ、種々の講演やコレージュ・ド・フランスにおける講義は、依頼者の要望にこたえながらも、ヴァレリーがみずからの芸術観や作品観を聴衆という目の前の「社会」に向けて語ったものである。つまり『カイエ』においては必要ではなかった「社会を説得する」という契機が生まれたのであり、ここでヴァレリーは、聴衆にある実験をするようにながしたり、みずからの特異な体験を効果的に援用したり、思考を図式的に整理したりと、さまざまな工夫を試みるようになる。ここで結合させられた抽象的な芸術論と具体的な実験や体験は、しばしば『カイエ』の異なった、というより相互にまったく無関係に思われるトピックを扱う諸断章に由来するものであり、本書の探究にとつても大きな示唆を与えてくれる。すでに述べたように、われわれの目的は、ヴァレリーの芸術哲学を読み解くことではなく、ヴァレリーのテキスト(間)に芸術哲学を読むことだからである。ただし、この時期のテキストのみならず、必要に応じて一九一七年以前のテキストも参照していく。

他の専門家によるヴァレリーの研究の状況についても、われわれの「芸術哲学」との関連においてのみ述べておきたい。ヴァレリーに向けられる問いが、社会的・存在論的なものではなく、修辭的・内在的なものにかたよってきたその理由についてである。

これまでのヴァレリー研究は、ヴァレリーの作品を、なによりもまず「創造」と結びついたものとして理解してきた。無数の草稿を手がかりにひとつの作品ができあがるまでのプロセスを明らかにする「生成研究」はその典型であるし、作品にひそむテーマや類出するイメージの系譜を明らかにすることも、ヴァレリーという作家についての研究に収斂するという点で、やはり創造との結びつきを重視したものである。これらはいわゆる文学的なアプローチだが、他方には美学的ないし哲学的なアプローチも存在している。しかしこのアプローチも、詩学の復権を主張するヴァレリーの、明晰な反省的意識によってとらえられた創造行為の記述を分析することに力をそそいできた。内在的な視点をとるにせよ、反省的な視点をとるにせよ、作品は「定着された創造行為」であり、その価値は問われるまでもなかったのである。

(2) こうした「作品」と「創造」の結びつきを助長した要因のひとつとして、やはり『カイエ』の存在は大きかったと言うべきだろう。『カイエ』は、「自分の形成作用」の記録たるその内容においても、また書き手の死によって中断されたというその形式においても、まさに壮大な「未完のエクリチュール」<sup>(注10)</sup>である。しかもそれは早朝の数時間という、いわば一日のうちでいちばん「非社会的」な時間に、孤独にこもった状態で書かれている。もともと、じっさいに『カイエ』を読んでもみると、直観に満ちてはいるものすつきりとした平易な言葉で書き連ねられており、難解な私的言語に挫折してしまうということはない（とはいえず、『カイエ』校訂者の労力を軽んじるつもりはない）。しかしながら、その習慣の「異様さ」が、「未完の作家」「書くことに没頭する作家」というイメージをヴァレリーに付与したことは想像に難くない。つまり、ヴァレリーは作品を世に発表することよりも創造のプロセスをこそ重視したのであり、そうであるならば、作品はまずもって創造行為の記録として読まれるべきだ、と考えられてきたのである。

B

やっかいなのは、ヴァレリー研究において、創造行為の分析が非常にしばしば「自我」の問題系と結びつけて論

じられてきた、という事情である。「書く」とは「自分に向かって言う」ことに他ならず、したがって「自我の二重化」という、ヴァレリーが好んで論じたトピックへと接続されるのだ、と。

C、外にだす表現するという本来は社会的側面をもつはずの行為が、自意識内部の二重化の問題としてとらえられてきた経緯があるのである。これは構造主義を経た後でヴァレリーを読み直す作業の中でとくに強まっていった研究の方向であり、われわれの関心とは異なるものの、主体（の解体）をめぐる執拗な問いとしてヴァレリーの詩学を読む可能性をひらいたことで、ヴァレリーにひとつの思想的な位置を与えた。この世代を代表する研究者であるセルジュ・ブルジャが、その著作『ポール・ヴァレリー——エクリチュールの主体』のなかで、「口耳 (Bouchoreille)」という、あまりに<sup>(注1)</sup>デリダ的なヴァレリーの造語を用いながら、書くことに伴うこの自我の二重化ないし分裂について論じているのはその典型である。言葉を使用するという行為が不可避免的に顕在化させる主体の分裂は、身体を場として起こるものだが、しかし他方で身体こそが、変化するものの基盤にある不変の物体として、わたしの存在をひとつにまとめるものでもあるのだ。ブルジャが強調するのは、<sup>(3)</sup>こうしたパラドックスに敏感な書き手としてのヴァレリーの位置づけである。

D、われわれはあまりにも、ヴァレリーを「書くこと」に閉じ込めすぎたのではないか。確かに、何ができあがるのかもわからないまま無心で作ることは楽しいし、作ることの魔術的な側面や理知的な側面について考えをめぐらすこともまた魅力的だ。しかし、ヴァレリーにはもうひとつのプロジェクトがあった。ヴァレリーはかならずしも「創造に閉じこもる」ばかりの作家ではない。

E、出版に対してカ<sup>(エ)</sup>ジョウ<sup>(エ)</sup>なまでに慎重な態度を示すことがあったが、それは創造のプロセスに固執したからというより、詩を書くこととそれが「作品」という社会的な存在になることとのレベルの違いに意識的であったし、ことの裏返しに他なるまい。作品が社会に流通して読者のもとにとどくという事実にはきわめて自覚的であったし、この事実について思考をめぐらした結果、<sup>(4)</sup>みずからの創造性を、この創造以降のプロセスに賭けていたようにさえ見える。別の言い方をすれば、ヴァレリーの創造行為は、書くという狭義の創造が終わったあとの過程をも含むと考えるべきではないのか。もちろんそれは作者の手のおよばない領域だ。しかし、手がおよばないからこそ可能であるような創造もあるのではない

か。ヴァレリーの「もうひとつのプロジェクト」とは、そのような創造後の創造に関わるものだ。

その意味では、先にみたヴァレリーの引用のハン<sup>(オ)</sup>ラン<sup>ン</sup>ぶりも、もしかすると「もうひとつのプロジェクト」がまだ進行中であることの証拠なのかもしれない。(……) このプロジェクトにおいては、作品とは「装置」であるとヴァレリーは語っている。そして、この装置の目的は、「身体的な諸機能を開拓すること」であるという。身体的諸機能を開拓する装置？ 何やらフィットネスクラブに置いてありそうなウェイト・トレーニング用のマシンのようなものを想像してしまうが、われわれはつまり、ベンチプレスでもするように、作品という「装置」を体験しているということだろうか。そして、それを通じてわれわれは、ヴァレリーによって身体的な機能を鍛えられているのだろうか。さらにヴァレリーは、作品によって身体の諸機能を開拓することは、結局、身体を「解剖」することであると言う。身体解剖をモチーフにした作品ではない。作品がわれわれの身体を解剖するのだ。もちろん作品はわれわれを殺しはしない。内臓や骨が取り出されるのではなく、作品は生きたままわれわれを解剖する。それはいったいかなる解剖なのか。いかにして作品が身体を解剖するなどということが可能なのか。これらの問いに答えることが、「芸術哲学」に課された任務である。

(伊藤亜紗『ヴァレリー——芸術と身体哲学』による)

- (注1) マラルメ——一八四二〜一八九八。ステファヌ・マラルメ。十九世紀フランス象徴派を代表する詩人。
- (注2) 本書——本文の出典『ヴァレリー』を指す。
- (注3) ファクシミリ版——手書きの原稿や楽譜の初版などをそのまま写真製版して出版したもの。
- (注4) プレイヤード版——プレイヤード叢書。パリのガリマール出版社刊行の世界文学全集。フランス文学を主とする。
- (注5) アンドレ・ジッド——一八六九〜一九五一。近代フランスの代表的作家・評論家。
- (注6) ピエール・ルイス——一八七〇〜一九二五。ベルギー生まれのフランスの詩人・小説家。
- (注7) アカデミー・フランセーズ——十七世紀発祥のフランスの国立学術団体。

- (注8) コレージュ・ド・フランス——フランスの学問・教育の頂点に位置する国立の特別高等教育機関。
- (注9) すでに述べたように——1ページ目の中略箇所にて述べられた。
- (注10) エクリチュール——書くこと、書かれたもの。
- (注11) デリダ——一九三〇〜二〇〇四。ジャック・デリダ。ポスト構造主義の代表的哲学者。
- (注12) モチーフ——主題。中心的思想。

\*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①  
⑤

(ア) ユウゼン

① ヨユウ 綽々とした態度

② ユウキユウの時を思わせる大河

③ 周囲よりユウリな立場

④ 低い金利でのユウシ

⑤ 華やかでユウソウな音楽

(イ) タキ

① キセンを制して攻める

② 歴史のカツキとなる事件

③ 人生のキロに立つ

④ ボキの資格を取る

⑤ キハクを込めて立ち合う

(ウ) オウセイ

① シホンセイの弊害を指摘する

② 疲れてシセイが崩れる

③ シセイ杜甫の作品を鑑賞する

④ 殺伐とした雰囲気が出ウセイされる

⑤ お祭りがセイキョウのうちに終わる

(エ) カジヨウ

① ジョウジョウ酌量の余地がある

② 飛行機にトウジョウする

③ 襲名のコウジョウを述べる

④ ジョウマンな説明に眠気が差す

⑤ ジョウヨキン の扱いで対立する

(オ) ハンラン

① ルイランの危機

② 近代医学のランシヨウ

③ 指揮系統のコンラン

④ 図書のエツラン

⑤ ランガイの注記

問2

空欄

A

く

E

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号はA―、B―、C―、D―、E―。

- ① たしかに
- ② さらに
- ③ したがって
- ④ 一方
- ⑤ つまり
- ⑥ しかし

### 問3

傍線部(1)「そこには『日記』のような出来事が書かれてはならず、また『わたしの思想』の構築でもなく、断章形式によつて、『可能な思想』『自分の形成作用』が展開されていく」とあるが、『カイエ』がそのような内容となった理由として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 読者の目を意識することなく記されとりとめのない断章こそ、自由な思索の発展に必須の前提であると確信していたから。
- ② 早朝というもつとも非社会的な時間に去来するイメージの断片を記すことで、何ものにもとらわれない自由な発想で考へることができから。
- ③ 他人の目を気にする必要のない環境で思索し確たる認識を得ることこそが断章執筆の目的であり、他人に語るためのものではないから。
- ④ もともと他人に読ませるためではなく、将来の思索のための下準備として思いついたことを自由に記す目的で書いたものだから。
- ⑤ 思索の過程を断章形式で記すことで、後に検討しなおすことが容易になり、その作業がまた新たな思索をもたらすようになるから。

#### 問4

傍線部(2)「こうした『作品』と『創造』の結びつきを助長した要因のひとつ」として、筆者は『カイエ』の存在を重視しているが、それはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 最も非社会的な時間に孤独にこもって書かれた断片の内容が、創造行為という作品の完成への過程を明らかに示しているため、研究が非常に進展したということ。
- ② 未完成で断片的な章段の集積と、その作業が作家の死によって中断されたことが、創造の過程を分析する研究をするうえで大きな示唆を与えたということ。
- ③ 膨大な量の未完の断章を孤独に書き記しつづけたという事実が、作品の完成よりもむしろ創造の過程に魂をささげた作家というイメージを定着させたということ。
- ④ ヴアレリーに関する文学的・哲学的な研究の双方が、膨大で未完のまま遺された断章の内容を分析することで多大な成果を挙げることとなったということ。
- ⑤ 孤独な状態で書き続けられた断章が、未完成ではあるが比較的平易な記述であったために、ヴァレリーは創造の過程を何より重視したと考えられたということ。

問5 傍線部(3)「こうしたパラドックス」とあるが、その説明として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は 13。

- ① 言葉を用いて記すということは、自己の身体が語る側と聞く側の両者に分裂する状況をもたらすが、同時にその身体が自己の統合の基盤でもあるということ。
- ② 外部に向かって表現するという行為が、かえって語りながら同時にそれを聞くという自己について二重化された意識をもたらしてしまうということ。
- ③ 言葉を用いて記すことによって、筆者の身体の上で語ることに聞くことが同時に行われ、筆者の主体が二つの存在に分裂してしまうということ。
- ④ 普段は一つにまとまった状態でいるものの、書き記すという行為は書く側という主体とそれを聞く側という客体という二つの自己を想定させるということ。
- ⑤ 言葉を用いるという行為は、不可避的に主体を語る側と聞く側の両者に分裂させるが、身体自体の分裂は回避されるので主体の実存は安定しているということ。

問6

傍線部(4)「みずからの創造性を、この創造以降のプロセスに賭けていた」とあるが、どういふことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は14。

- ① ヴアレリーの未完の作品は、未完であることによって読者の多様な解釈の可能性を保証し、それらの可能性が新たな創造の契機となるように意図されたもので、そこにヴァレリーの狙いがあったということ。
- ② ヴアレリーにとって自己の創造性は自分一人のものではなく、作品を契機として発揮される読者の創造性をも取り込んだより普遍性の高い作品を完成させるためのもだったということ。
- ③ ヴアレリーは未完の断章をも含めて、自己の作品が読者を触発し、さらなる創造をうながすことによって自己の作品が完成すると考え、自らの手のおよばない領域にも到達することを夢みていたということ。
- ④ ヴアレリーの期待は、自己の作品によって読者が刺激され、読者の自発的な身体的鍛錬によって身体的機能の開拓を図り、より意義のある充実した生活を読者にうながすところにあったということ。
- ⑤ ヴアレリーにとって自作はそれ自体で完結したものではなく、読者がその作品を享受することを通じて自己を再認識し、読者自身の自己刷新の契機となるものであってほしいと思っていたということ。

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は 15・16。

- ① あらゆるテキストは引用の対象となるが、なかでもヴァレリーのテキストは多数の引用が成されることで元の出典の所在さえも分からなくなっている点に特徴がある。
- ② ヴァレリーの発言や遺された膨大な手稿の存在によって、自己の内面を孤独に見つめながら創作に没頭した作家としてヴァレリーを捉える研究が主流となってきた。
- ③ 早朝といういちばん非社会的な時間に孤独に自己と向きあうことができたからこそ、『カイエ』の内容は断片的でありながら作家の内面をよく表すものとなった。
- ④ ヴァレリーが好んで論じた「自我の二重化」の問題に関しては、ポスト構造主義の時代に発表されたデリダ的造語を駆使したブルジャの論考が最も優れた成果である。
- ⑤ ヴァレリーの創造性を「書く」という行為に一元化して捉える見方が、彼が生前に遺した膨大な断章の持つ意味をかえってわかりづらくさせてしまっている。
- ⑥ たとえば『カイエ』の内容と後の活動との関係を考えても、創作行為とそれが読者に読まれることの違いを意識したヴァレリーの社会的側面も検討する価値がある。

## 第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

もちろん、人間の感知能力に限界がある（その限界はかならずしもすべての人間に厳密に一樣に決まっているわけではないことは認めておかなければならないが）ことに異存のある人はあるまい。しかしそのことが、どのように「……として見る」ことに関わりがあるのか。

まず少なくともそのことから、われわれには一つの結論が得られる。われわれが見ている世界は、一つの選ばれた世界である、という結論がそれである。もっと他のように見え、もっと他のように感じられるかもしれないこの可能的多様体としての「世界」から、われわれに与えられた窓を通じて選定された「一つの世界」が得られている、ということのをわれわれは忘れてはならない。

I そして、この基本的な構造は、そうしてわれわれに与えられた感覚の窓を通じて選定された「一つの世界」についても、再びまったく同じように適用できるのである。

初歩的な心理学の実験に使われる反転図形を考えてみよう。たとえばルービンの酒杯と横顔、という図形がある。この場合にわれわれにとって重要なのは、地と地でない部分（地でない部分ということを表わす適切な日本語がないのが不便だが、ここでは、一応「本体」と呼んでおこう）との読み取りである。その読み取りの逆転が図形の「反転」を起こす。真中の二本の曲線の左右それぞれに本体を、二本の曲線に挿まれた部分（とその延長）を地と読み取れば、二つの人間の横顔が見える。逆に二本の曲線に挿まれた部分を本体と読み取れば、そこに酒杯が読み取られる、というわけだ。

これは、われわれが、何を背景（地）とし、何を本体とするか、ということを判断する機能を、見るという行為のなかで働かせていることを意味している。聴覚ではつきりと判り易いのは、「カクテル・パーティー効果」と呼ばれる現象である。カクテル・パーティーでは、グラスの触れ合う音、氷を割る音、人びとの談笑する声、衣ずれ、足音、バック・グラウンド・ミュージックなどなど、会場はほんやりと聴いているときには、わーんという音にしか聞こえないような喧噪のなかにある。しかし、われ

われは、その騒音のなかで、聴こうと意識することによって、誰それさんのおしゃべりだけを、言わば「本体」として取り出し、あとを「地」として聞き流す、ということが出来る。百いくつの楽器が交響しているオーケストラの演奏会場で、それを「全体」として聞くこともできれば、そのなかの第二クラリネットの音をそれだけ選り出して本体として聴くことも出来る。

これは、人間に見て取られたり、聴き取られたりする刺戟が、人間の側の意識の働きによって、可変であることを意味している。もちろんそこには完全な任意的可変性があるわけではない。

II

しかし、少なくとも、絶対的的唯一性がないことだけは明らかである。

われわれが視野のなかからペンだけを取り出して読み取るのも、「……として見る」という行為を支えるきわめて重要な前提構造であるが、それはまさしくこうした状況の延長上にあると言えよう。

これは、また、人間の外界認知の特徴として知られるパターン認知とも関係している。人間の書字読取能力が端的に示しているように、人間は、視界のなかのある特徴的なパターン（もしくはゲシュタルト）<sup>(注1)</sup>を適確に把み出す能力をきわめて豊かに与えられている。しかも、その能力は、視界のなかの刺戟のすべてを等分にしかも継時的に受け取るのではなく、ある種の刺戟群だけを共時的に把み出す、と言われている。実際アイカメラなどで人間の視線がどのように視界をスキャンするかを調べると、極めて素早い無駄のない動きで、パターンを把える有様がよく判る。

しかし、こうしたパターン認知を含めて、人間の外界の「見方」には、言語系が重要な役割を果たしていることを、忘れるわけにいかない。これは実際に体験した話だが、アメリカ人は虹が大変好きなので、アーチ状の建造物があるところへ虹を塗りたいという趣味がある。サン・フランシスコでも、ロス・アンジェルズでも、ホノルルでも、ニュー・ヨークでさえも、ハイウェイのトンネルやホテルのアーケードなどに彩色された虹が目についた。車でそうしたトンネルの一つを通過するとき、思わず、どうして七色も塗り分ける面倒なことをしても虹を塗るのかな、と言うと、同乗のアメリカ人が逆襲した。「え、あれだけの時間で七色を見分けたのか」考えてみると、日本語の言語習慣では、虹は七色に決まっているが、英語ではかならずしも虹と七色とは結びつかない。私はもちろん七色を見分けたわけではなく、虹だから七色だと短絡したのだが、この短絡過程はアメリカ

人と共有されてはいないのである。

そこで英語で虹の七色を並べようとして、はたと困った。「藍」がないのである。もちろん、ダーク・ブルーなどという語は、英語で日常つねに使われる。ところが「インディゴ」という「藍」に当たる単語は、英語の日常的語彙のなかには、かならずしも入っていない。ダーク・ブルーは「青」の一部ではあっても、けっして「藍」ではない。つまり「ブルー」（青）から「パープル」（紫）に移り行く部分に、その両者から完全に独立した一つの色帯を認めるか認めないか、言い換えれば「藍」を一つの色として X するか否か、もう一度言い換えればスペクトルのその部分を「藍」として見るか否かというのは、単にその視覚的刺戟を受けるか否かの問題ではない。日本語の日常的言語習慣のなかで「藍」をどのように使っているか、英語のそのなかで「インディゴ」がどのように使われているか、ということと、この「藍」を見るか、見ないかの問題は深くかかわっている。こうして、<sup>(1)</sup> われわれの外界の把握は、われわれが日常用いている言語に大きく依存していると言つてよいことになる。

先に述べた「概念」を巡る問題も、実は、この「言語による外界の把握」と密接に関係していることになる。

たとえば、「インディゴ」という単語を知らないアメリカ人——そういうアメリカ人がいることはけっして良い加減な想像ではない、充分あり得ることである——にとつては、スペクトラム表のなかで、「ブルー」から「パープル」へ移り行くところには、独立した色を見ないであろう。「藍」を使い慣れている日本人にとつては、明白にそこには一つの独立した色を見る、にもかかわらず。しかもなお、二人は、同じものを見ているのである。

「ペン」という概念をもたない人は、眼前にペンを見ることはできない。しばしば引用されるイマヌエル・カント（一七二四—一八〇四）の言葉を、多少曲げて援けたすに使うとすれば、ここではこんな風に言えるだろう。「概念なき感覚は盲目である」。

このように見てくると、僅かに一本のペンの存否を巡る問題であっても、その検証は、単に、感覚刺戟を受け取るだけでは果たされることが明らかに。つまり、前述のアメリカ人と日本人が同じものを見ている、という意味で、「……を見て

いる」という言葉遣いをしたとき、<sup>(2)</sup>「……を見ている」という命題が、あるものの存否を決定するための手続きを担うわけにはいかないことは明白であろう。

### III

「……」の部分にその存否が問題にされるような種類の何ものかが入ることはできないからである。

他方、同じ例で、アメリカ人と日本人とが違うものを見て、という言葉遣いをしたとき、そういう意味での「見ている」という言葉に対しては、「何ものかを見ている」という言い方が許されることになるが、しかし、今度は、その「……を見ている」という行為は、単に **Y** に何ものかについての視覚的刺戟を受け取る、というのではなくて、見ている側のもつ枠組や規定性、パターンやゲシュタルト、モデルや<sup>(注2)</sup>パラダイムといったさまざまな言葉で呼ばれる何らかの概念枠を投影する、という営為を含んでおり、それ抜きでは成立しないことになる。

言い換えれば、「ペンを見ている」という言い方が許されるとすれば、それは、客観的な事実の観察ではなく、一つの事実の造り上げなのだ、というわけである。このことは、「事実」を表わす英単語の《Fact》が、ラテン語では本来「人為によるもの」という意味であったことを考えれば、それほど不自然ではないが、結局、その観点からすれば、「ここに一本のペンが存在する」ということを検証するべく導入された「私は今眼前に一本のペンを見ている」という命題は、（もしそれをしも検証と言わなければ）「ここに一本のペンが存在する」という「事実を造り上げる」のに役立つている、としか言えなくなるのである。

もちろん、この言い方は、ある意味で非常に不健全であり、グロテスクに響くことは、私も承知している。その上ただちにこんな反論が出てくることも予想できる。

それはおかしい。たとえば人間は一人も存在しなくても、眼前のペンは存在しているはずではないか。何かの拍子で人間がある瞬間にすべて死に絶えたとする。そのとき世界もまた消滅するのか。お前が死んだあと、お前の妻君やお前の子供は存在しないのか。それならお前は何をあくせく働いて僅かでも財産を残してやろうとするのだ。ペンは人間が存在させたのではなくて、そのものとして存在しているのであり、お前の子供はお前が存在させているのではなくて、そのものとして存在し続けているのだ。

まことにもっともな反論である。こうした反論は常識的であると同時に健全であり、かつ私の経験では科学者の大部分がこうした反論を提起する側にいる。

健全な常識が強固に人間の「死後の世界」を主張し、科学者の大部分がやはり人間の「死後の世界」を確信している、というのは、なかなか面白い事実ではないか。もちろん、普通に言われる「死後の世界」と今ここで私の使った死後の世界とは意味が違うから、これは冗談としてもなりたないと言われれば、それはその通りである。けれども実は、この冗談のなかに通常の意味での「死後の世界」についての一つの示唆があると同時に、科学的な知識の根元についても、一つの示唆が含まれているのである。それはおいおい明らかにしていくことにしよう。

さしあたりは、この種の健全かつ常識的な反論に対する私の立場からの反応（それは再反論というよりは反応としか言えないものである）を記しておかなければなるまい。

第一に、私はかならずしも自分の外界を自分が存在させたと言ったわけではない。IV 外の世界は、パレットにさまざまな絵具を自由にひねり出すように、人間が勝手にひねり出すことができるものではない。

もっとも、その点を徹底させることも不可能ではない。たとえば、今私が見ているペンは私が見ている間だけ私にとって存在している、私が視線を外した瞬間に、それは消滅する、視線を戻すとその途端にそこに現われる、という非常にグロテスクに、奇矯ききょうに聞こえる言い方も、実は論理的には可能であって、この言い方を貫いたとしてもかならずしも不整合は生じないし、常識が判断するほど非常識な結果も出てこないのである。

ただ、この最もラディカルな言い方は、私としてはかならずしも取らない。それには理由があるが、それは後廻しにしよう。要は、外の世界が人間の勝手にひねり出せるようなものであるわけではないことは一応認めておこう（これをどういう手続きで認めるのか、という問題は残されるにしても）。しかし、その点については、私は、すでに多少用心深い発言をしたつもりなのだ。私は、一本のペンを見ているという事実がそもそも一種の造り上げられたものである、と言った。そしてまた、それが「ここに一本のペンが存在する」という事実を検証する、と言うのなら、それは、前者の事実は、後者の事実が造り上げられるのに

役立つ、という意味でしかない、と言った。またこの項のタイトルは「……を見る」ことは「……を存在させる」ことと同じである、という主張を暗示しているが、しかし、「見る」ことと「存在させる」ことと書かずに、「……を」の部分とくに付け加えていることに留意して戴きたいのである。

すでに述べたように「……を」の「……」の部分には、通常概念が入る（もちろん固有名が入ることもある）。そして私は、「私は眼前に一本のペンを見る」という事実は「ここに一本のペンが存在する」という事実を造り上げるのに役立つ、と言ったのであって、外の世界一般が存在論的に、「見る」ことによって「存在」させられる、と言ったわけではない。

つまり、外の世界一般はある意味では人間と無関係に存在していることは認めるにやぶさかではない。しかし、その外の世界一般が、人間にとっていったいかなる個々の要素からなり、その要素は人間にとっていかなる姿をしているか、と言えば、そこは、人間の認識行為が「造り上げる」と考える以外には考えようがないのではないか、と言っているにすぎない。

しかも、その「造り上げる」に当たっても、人間の側が任意勝手にどうにでもできる、というわけでもなく、外の世界がもっているある種の許容範囲の限度の中で、という制限を認めてもよい。ただし、その限度なるものは、実は人間に知られているわけではない、という一言を付け加える限りにおいて。

ここまで譲歩すれば、私の言っていることは「健全な」常識とさして変わらなくなる。しかし問題は、最も厳密な意味で観察された事実のみに従い、観察された事実中に忠実であり、観察された事実だから構成されている、と考えられている自然科学においても、あるいは日常的にほとんどまったく疑われたことのないような常識的な場面（たとえば「ここに一本のペンが存在する」というような事物を扱う場面）においても、<sup>(3)</sup>等しく人間の側のもつ何らかの「型」の投影が、知識を根幹から支えている、という一点なのである。

（村上陽一郎『科学史・科学哲学入門』による）

(注1) ゲシュタルト——ドイツ語。部分から導くことのできない、有機的・具体的な全体性のあるまとまった構造を持つたもの。形態。

(注2) パラダイム——英語。ある時代のものの見方・考え方を支配し規定する認識の枠組み。

\*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 本文中の空欄  ～  のうちで、次の文章を補う箇所として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 。

存在論的な身分としては、外の世界は私自身と同等の権利を主張できよう。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

問2 空欄  ・  を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は  ・ 。

- |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|
| <input type="text" value="Y"/> | <input type="text" value="X"/> |
| ① 主体的                          | ① 追求                           |
| ② 明示的                          | ② 同定                           |
| ③ 肯定的                          | ③ 確立                           |
| ④ 受動的                          | ④ 開発                           |
| ⑤ 恣意的                          | ⑤ 否認                           |
-

### 問3

傍線部①「われわれの外界の把握は、われわれが日常用いている言語に大きく依存している」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 日常的な言語体系のなかに対応する語彙をもたない事物の存在は、人間の認知能力の限界を示す好例だということ。
- ② 人間にとって外界の事物は、それを表現する言葉がなければ概念として存在せず、それが何であるのか理解できないということ。
- ③ 人間は外界を把握する際に自己の言語系の語彙に含まれないものをも認識するが、語彙を増やすことでそれに対応できるといふこと。
- ④ それぞれの言語体系が同一の現実にも必ずしも対応していないという事実は、言語体系の違いは認識の違いであることを示すということ。
- ⑤ 人間は自らの言語の体系を用いて外界を認識するので、事物もそれを表象する言葉がなければ個別の存在として捉えられないということ。

#### 問4

傍線部(2)「そういう言葉遣いとしての『……を見ている』という命題が、あるものの存否を決定するための手続きを担

うわけにはいかない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 21。

- ① 人間の認識は自己の言語体系の何如によって左右されるものだから、「……を見ている」という命題は対象が実在しているかどうかを問わず有効な命題であり、その真偽が対象のありようを決定するものではないということ。
- ② 同じものを見ているも前提とする言語体系の枠組みが異なれば見えてくるものも異なるので、「……を見ている」という命題は依拠する言語によって現実として認識する内容が必ずしも一致しないという事実を示すということ。
- ③ 人間は自己の内面の枠組みを参照しながら対象を認識する以上、「……を見ている」という命題も自己の内面の反映であるしかなく、そのことのみをもって見ている対象の客観的実在性を証明できるわけではないということ。
- ④ 内面の省察から対象へと向かう人間の認識の特徴を踏まえると、「……を見ている」という命題は必然的に自己の内面を対象へと投影する行為となり、その対象が実在しているかどうか主観的には決定できないということ。
- ⑤ あらかじめ獲得された言語体系によって対象の存否を認識しているので、「……を見ている」という命題も言語体系によって規定されたものすぎず、本当に見ていると言えるのかどうか不分明であると考えられないということ。

## 問5

傍線部(3)「等しく人間の側のもつ何らかの『型』の投影が、知識を根幹から支えている」とあるが、どういふことか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 人間とは無関係に実在している世界も、それが人間の認識の対象となる段階で人間が内的に保有する枠組みに規定されるため、世界に対するどのような知識も不完全で信用するに足りないものとならざるを得ないということ。
- ② たとえ客観的に実在するものであっても、それに意味を与える枠組みなしには認識の対象にすらなりえず、したがってどのような次元の知識であってもそれを意味づける枠組みの存在を前提としているということ。
- ③ 外界の事物は客観的に実在しているというのは事実であっても、それを捉えるのは人間の主観に他ならず、人間にとつてはあくまでも主観的に与えられる意味や価値がすべての知識の基盤となっているということ。
- ④ 人間は言語に代表される社会的な枠組みによって世界を認識するので、客観的実在もその枠組みの変化によって世界の中における位置が変わり、それについての知識も必然的に具体的内容が変化してゆくということ。
- ⑤ すべての知識は人間の世界に対する認識からもたらされるが、その認識が日常的に固定された型に従って為されるものであるため、どのように高度な知識であっても日常的知識と同じ構造を基盤としているということ。

問6 本文の内容と一致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 23。

- ① 人間は外的世界の様相をそのまま受け取っているのではなく、意識的にであれ無意識的にであれ選択的に捉えているのである。
- ② 英語で虹が必ずしも七色と結びつかないのは、「藍」に相当する「インディゴ」が一般的な語彙として共有されていないからである。
- ③ 認識は何らかの概念枠を参照することで成立するので、認識されたものは客観的実在というより概念枠を通して創作されたものである。
- ④ 人間は主観によって対象を認識するので、自己の主観の上で認識されている間だけ対象が存在すると言っても必ずしも誤りではない。
- ⑤ 人間の認識は自己の内面的枠組みとともに、認識の対象の客観的なありようの二つの面から構成されてゆくものである。

### 第三問 以下の問いに答えよ。

問1 次の文の「の」と同じ用法のものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

窓から見えるあの山が八ヶ岳だ。

- ① 骨髄移植には若者のを使うほうが結果がよい。
- ② 嘘吐きの言うことは信用ならない。
- ③ たらちねの母を思う心に偽りはない。
- ④ 道でうっかり時計を落としたのは私だ。
- ⑤ 顕微鏡で雪の結晶を観察する。

問2 間違った漢字を含む文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 万難を排して膠着状況を打開する。
- ② 平凡な楽曲が端整な編曲によって生まれ変わる。
- ③ 諸事情を勘案して最善の方針を立てる。
- ④ 激しい討論の末、常識的な結論に帰着した。
- ⑤ 人生を統べる格率と考えて大事にしている。

問3 A・Bの外来語とその訳語の組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 26・27。

A 26

- ① パトリオティズム―愛郷心
- ② アナーキズム―無政府主義
- ③ ファンダメンタリズム―超近代主義
- ④ エスノセントリズム―自民族中心主義
- ⑤ リバタリアニズム―自由至上主義

B 27

- ① アンガージュマン―憤怒
- ② デイスクール―言説
- ③ アブストラクト―抽象
- ④ メランコリー―憂鬱
- ⑤ コンセンサス―合意

問4 次のX～Zの漢字と読みの組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号

号は 28  
～  
30。

X

28

- ① 膏血 — こうけつ
- ② 圧搾 — あっさく
- ③ 齷齪 — あくせく
- ④ 行燈 — ぎょうとう
- ⑤ 教鞭 — きょうべん

Y

29

- ① 普賢 — ふげん
- ② 知音 — ちおん
- ③ 会得 — えとく
- ④ 氣質 — かたぎ
- ⑤ 背理 — はいり

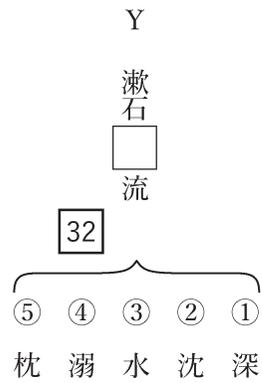
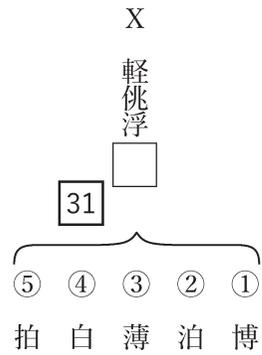
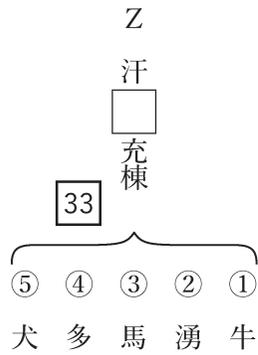
Z

30

- ① 山車 — だし
- ② 山葵 — さんしょう
- ③ 祝詞 — のりと
- ④ 心太 — ところてん
- ⑤ 灰汁 — あく

問5 次のX～Zの四字熟語の空欄を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

31  
33。



問6

次の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

肯綮

- ① 心血を注いで手に入れたもの。
- ② 才能ある人物の少々の欠点。
- ③ 紆余曲折を経て最終的に至った境地。
- ④ ものごとのいちばん大事な要点。
- ⑤ 業績に対して主張する当然の権利。

問7

慣用句の使い方として正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 酒席で上機嫌でいるのだから、うまく合いの手を入れれば相手も本音を語り出すだろう。
- ② これ以上負けてしまうと上位者への挑戦権が得られなくなるので、ここを先途と頑張った。
- ③ こうして遠方まで来て捜すのだから、足下の明るいうちに相手を見つけたいものだ。
- ④ 真面目に話しているのに、斜に構えた態度をとられて本当に悲しくなった。
- ⑤ 不世出の天才と呼ばれた役者は、引退興行で大成功を収めてみずからの花道を飾った。

問8 作家と作品の組み合わせとして正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 中里介山 — 『大菩薩峠』
- ② 石川淳 — 『紫苑物語』
- ③ 松本清張 — 『砂の器』
- ④ 志賀直哉 — 『城の崎にて』
- ⑤ 芥川龍之介 — 『地獄の花』

# 正 答 表

入試区分： 一般A日程入試1月31日試験

科目： 国語

問題番号	正 答	問題形式	備考
1	2	一問一答	
2	3	一問一答	
3	5	一問一答	
4	5	一問一答	
5	2	一問一答	
6	4	一問一答	
7	2	一問一答	
8	5	一問一答	
9	6	一問一答	
10	1	一問一答	
11	4	一問一答	
12	3	一問一答	
13	1	一問一答	
14	5	一問一答	
15	2	複数組み合わせ順不問個別	
16	6	複数組み合わせ順不問個別	
17	4	一問一答	
18	2	一問一答	
19	4	一問一答	
20	5	一問一答	
21	3	一問一答	
22	2	一問一答	
23	2	一問一答	
24	5	一問一答	
25	2	一問一答	
26	3	一問一答	
27	1	一問一答	
28	4	一問一答	
29	2	一問一答	
30	2	一問一答	
31	3	一問一答	
32	5	一問一答	
33	1	一問一答	
34	4	一問一答	
35	3	一問一答	
36	5	一問一答	